
熊

守水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熊

【Nコード】

N8128P

【作者名】

守水

【あらすじ】

山の中での、人間とある生き物との出来事。

あなたは立ち上がった。一転して、大きく景色が広がる。何かいないか頭をめぐらせたあなたは、視界にあるものを見つけた。最近やたらと見かけるようになった、ずっと二本足で歩く生き物だ。なにやら言葉を交わし、ずかずかとあなたの縄張りに入ってくる生き物だ。

たいていその生き物たちは、あなたを見かけると逃げ出す。あなたにだつてそんな生き物と関わる時間などない。しかし視界の生き物は、なにやら細長い物を取り出し、その先をあなたに向けた。もちろん、あなたはそれが何であるかなど知らない。

その先端が、夕日に似た色の光のような物を発したと思った瞬間、あなたの頭は大きく後方に向いた。何かがあなたの頭を直撃したのだ。あの細長い物の先から、灰色のもやもやしたものが出てくるのを見ながら、あなたは衝撃に耐え切れず倒れた。

嗅ぎ慣れた土の匂い。しかし今あなたは、その優しげな匂いよりも、頭を襲うひどい痛みに、感覚を持つていかれてしまっている。温かい液体が顔を伝う。木や草で少し体を切ったとき、出てくるあの赤いやつだと、あなたは気付いた。

痛みに慣れてきて、しかしまだ動けないでいるあなたは、なぜ突然こうなったのか、考え始めた。あの生き物が持っていた、細長い物。あれが小さく光ったかと思うと、こうなったのだ。ああ、あれはもしか、自分たちが時々話していた、自分たちを殺す道具ではないだろうか。それを、自分は頭に受けてしまった。理由はわからないが、頭に受けることは腹に受けることより数倍ひどい気がした。

ほら、新たな音が。がさがりと藪を掻き分け、何かあなたが近づいてくる。土を踏みしめる足音も聞こえてきた。あなたは目を閉じている。でも意識はまだある。あなたはわかる。音が、あなたの顔の前で止まったのを。

目の前にいる生き物が、何か叫んだ。あなたには言葉はわからないから、何を言ってるかなんてわからないだろう。でもそこから、その生き物はどうやら嬉しそうだということが感じられた。

……あなたは怒っている。生き物を殺そうとして、なぜ喜ぶ？ 魚や虫ならわかる。あれらは生きるために殺すのだ。だが、山を下りて戻ってきた仲間の話では、この生き物が魚や虫のように自分たちを食べるのは稀で、自分たちに特殊なことをほどこし、この姿のまま、住処に置くというではないか。何のためだ。なぜ殺した仲間を土に返さない。山の糧としないのだ。なぜ既に存在しない物を、いつまでの残しておく。生き残るためでもないのに、なぜ自分たちを殺す。

怒りが、あなたの体に力を取り戻させた。この生き物は、自分たちで植物を作り出すことができる。しかし自分たちにはできない。植物がなぜか最近減り、自分たちの食べる動物も減ってきている。この生き物はいつもある時期になれば、かならず植物を生やし、必ずたくさんの実をつけさせることができる。それを、自分たちが少しもらっても、痛くないではないか。もっと下にはたくさんこの生き物がいて、食べ物もたくさんあるだろう。食べ物が減っているのも、この生き物たちが山の中にまで住処を作り始めたからだ。

あなたの手が、動いた。どうやらもう一度立ち上がれるようだ。目の前の生き物の気配はまだある。さっきよりも気配が近い。叫ん

だ口が、下のほうにあるようだ。あなたたちのように、四本足になつたのかもしれない。

さあ、起き上がれ。あなたは何も悪くない。この辺りのあなたの仲間も、誰もこの生き物を殺していない。あなたはこの生き物の作つた実を食べただけ。住処を荒らしてもいない。あなたは今までのように、決まつた距離だけ山を下りただけ。この生き物の住処がたくさんあるところに、行きたかつたわけじゃない。

あなたに非などありはしない。それなのに、あなたが立ち上がっただけで、あなたはこの生き物に攻撃された。そう、あなたは悪いやない。あんなに距離があつたにも関わらず、何もしていないのに攻撃した、この生き物こそが悪だ。これはあなたがあなたの命を守る、正当防衛だ。

さあ。

……ほづら、生き物が倒れた。何か言ってるようだ、あなたにはわからない。ただ、ひどく怖がつているようだ。あなたはまず、あの細長い筒を投げ飛ばした。藪どころか、その向こうの山林の中に消えた。

一歩進む。生き物は立ち上がることさえできないようだ。足がふらつくが、生き物よりはました。

あ、とうとう生き物が立ち上がった。なかなかすばしいが、あなたには敵わない。あなたは四本足になつて、走る。すぐに追いついて、まずその爪で生き物の後ろを裂いた。魚や小動物を殺しても、こんなに血は出ないし、叫び声も上げないだろう。手間がかかると、やかましい獲物だ。

生き物はまた倒れたが、しぶとく立ち上がり走り出した。だが遅い。あなたの傷が深くとも、優勢なのはあなただ。

あなたは生き物に近づくと立ち上がり、吼えた。あまり吼えるのは好きではないが、もうあなたは自分の命がなくなるのを知っている。この憎き生き物を殺した後で。

あなたの吼え声に、生き物はこちらを振り向いた。そこをあなたは両手で掴み、牙を突きたてた。あなたの顔のすぐ横で、生き物の口からまた叫び声が上がった。本当にうるさい。黙らせるために、あなたはより深く牙を潜りこませた。よけい叫び声がひどくなった。

噛み付いた場所の肉を食いちぎると、生き物はぱたりと倒れた。しかし生き物はまだ生きている。あなたは魚や小動物を仕留めるときと同じように、生き物の腹に食いついた。うまくないが、別に食べるためじゃない。叫び声がますます大きくなった。

腹の中身が見えたところで、生き物はとうとう静かになった。あなたは満足した。安堵すると同時に、あなたの傷が痛み出す。もう長くはないようだ。

あなたは、この野蛮な生き物の隣で死ぬのは嫌だった。だから力を振り絞り、あなたは歩く。すぐそこを下ったところにある、川原へ。

あの赤いやつが音を立てて地面に落ちているのを、あなたは川原の石の上を歩いているときに、気づいた。おそらく、あの生き物を殺していたときも、ずっと流れていたのだろう。脚が震える。手もだ。

もう一歩、進もうとしたところで、あなたは倒れた。痛みはもうない。代わりに、猛烈な眠気があなたを襲った。

あなたにはもうわかっている。理由もなく自分を傷つけた生き物を、同じ目に合わせてやっただけで、あなたは十分だった。あの生き物に怪我をさせられた時点で、わかっていた。この傷は、自分を死に至らしめるものだ。大抵、そういうことはわかる。

あなたは逆らうこともせず、眠気に任せて目を閉じた。死。死など怖くない。ただ眠るだけ。眠ってしまったえば、自分の存在がどうなるなど、わからない。知ることなどできないから、逆に幸せだと、あなたは思いながら、眠った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8128p/>

熊

2011年1月4日01時34分発行